

実社会でのアドバンテージを有する学生の育成

－ 上級国際会計問題討論研究会 －

高木正史

Masashi TAKAKI

これまでの約2年間の活動内容の概要



筆者

2009年5月に発足した上級国際会計問題討論研究会（以下、高木研究会と称す）は、テクニカル・プレゼンテーション実践、国際会計に関する知識の涵養および英語によるディスカッションを活動の三本柱として週に一回をベースとして活動中である。設立当初は繁里佳奈現研究室長（大分県立佐伯鶴城高等学校卒、現3回生）のみが会員であったが、現在は、丸山詩織会員（大分県立佐伯鶴岡高等学校卒、現1回生）ならびに三宅由香里会員（大分県立大分東高等学校卒、現1回生）の入会以降、現在は筆者のもとに3名の会員が集い、それぞれの会員が活動を行っている。いずれも志の高い学生である。

さて、これまでの活動の中で、まず会員のプレゼンテーション・スキルの向上が図られている。このスキルは、研究会内におけるプレゼン、または、高校生対象のプレゼン（オープンキャンパスや国際経営学部主催のセミナーなどでの研究会あるいは学部紹介）および、研究会活動実績報告における教員・在学生対象のプレゼンなどを通じて高められており、本研究会の設立趣旨でもある、現代の日本人に欠落している自己表現能力の向上という意味において、会員のプレゼンテーション・スキルは非常に高いといえる。そしてそのプレゼンと関連するスキルがテクニカル・ディスカッション・スキルである。高木研究会においては常に熱いトピックスに基づくテクニカルな議論が行われている。なお、設立当初の目標では、英語によるディス

カッションを活動の柱の一つとして掲げているために、2012年度からは英語によるディスカッションとプレゼンの機会を創設していきたい。そして、このようなテクニカル・プレゼンテーション・スキル、テクニカル・ディスカッション・スキルは、いまや高木研究会を特徴づける要素となっている。

また、英語に関しては、入門的な英会話の学習から始め、文法教育に留まらない使える英語表現の習得を目指して学習を継続している。そのような中、高木研究会は、国際観光都市としての別府市で開催された2つのイベントに参加し、生きた英語に触れる機会を得た。すなわち2009年10月には、筆者がThe 5th Asia-Pacific Management Accounting Forum（於、別府大学）にて英語報告を行った際に、外国人研究者による司会者補佐の一員として、繁里研究室長が、これを務める機会を得ている。さらに、APEC成長戦略ハイレベル会合が2010年8月7日および8日の両日において別府市で開催された際、筆者ならびに繁里研究室長は、APECハイレベル会合記念リレー講演会（於、別府国際コ



繁里佳奈研究室長
（大分県立佐伯鶴城高校出身）



向かって左：丸山詩織会員（大分県立佐伯鶴岡高校出身）、中心：三宅由香里会員（大分県立大分東高校出身）



APEC 成長戦略ハイレベル会合記念リレー講演会（於、別府国際コンベンションセンター、B-Con Plaza）に参加

ンベンションセンター、B-Con Plaza）に参加し（本講演には国際経営学部の学生が組織的に参加）、講演者のスピードのある英語に触れる機会を得ている。また、2011年からは、時事英語を学ぶことが可能な国際ニュースを聴くことにより、主としてリスニング能力の向上をも図っている。

次に、国際会計の知識習得に関しては、単に国際会計に関する書籍を読破することだけでは単調であると判断し、東京商工会議所が主催する、BATIC（国際会計検定）[®]、(Bookkeeping and Accounting Test for International Communication)（以下、BATIC[®]と称す）へチャレンジすることとなった。BATIC[®]は、Subject 1（英文簿記）および Subject 2（国際会計理論）の2科目から構成され、問題はすべて英語での出題であり、Multiple Choice（択一式）と Descriptive Question（記述式）によって出題される形式となっている。フルスコアは1,000であり、獲得したスコアに応じて称号が与えられ、200から319までが Bookkeeper Level、320から699までが Accountant Level、700から879までが Accounting Manager Level、880から1,000までが Controller Level となる。出題範囲は、原則として、「米国において一般に公正妥当と認められる会計原則」（Generally Accepted Accounting Principles in the United States）（以下、US GAAPと称す）からであるが、国際財務報告基準（International Finan-

cial Reporting Standards）、（以下、IFRSと称す）と US GAAP とのコンバージェンスの問題や IFRS の adoption（適用）の可能性も見据え、最近では、IFRS に基づく会計処理をも出題されている。BATIC[®] は日商簿記検定よりも受験者数も低いが、受験者の国際会計スキルがスコアによって測定されるものであり、BATIC[®] は将来性のきわめて高い資格である（受験者の属性は図1および2を参照）。また、Subject 2の学習は、米国公認会計士（以下、USCPAと称す）試験における科目のうち、Financial Accounting and Reporting (FAR) の出題内容と重複するため、USCPA 受験にも繋がるものである。

高木研究会では、この BATIC[®] のまずは Subject 1 へのチャレンジを全会員に求め、会員は勉学に励んでおり、2012年からは Subject 2 の学習をも開始する。

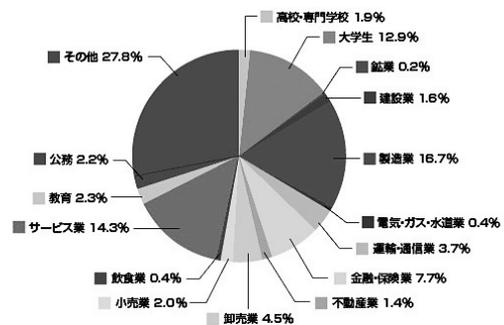


図1：BATIC[®] 受験者の業種（出所：東京商工会議所ウェブ・サイト）
※東京商工会議所の掲載許諾済

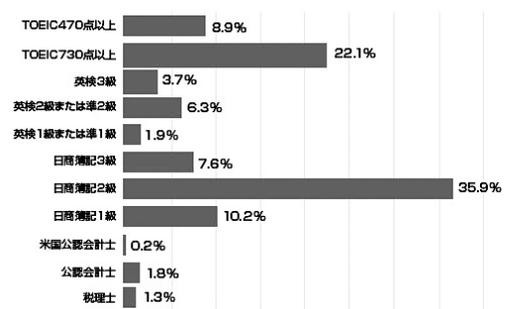


図2：BATIC[®] 受験者の取得資格（出所：東京商工会議所ウェブ・サイト）
※東京商工会議所の掲載許諾済

会員のさらなる能力開発と研究会の組織改革に着手

高木研究会は、サークルでも講義でもゼミでもない研究する者の集合体であるため、会員の向上意識はきわめて高い。そこで、組織をより強固なものにするために、会員の意見を取り入れながら、平成23年度より研究会規定の策定を

開始した。この規定により、会員は組織の中でのいわゆるコンプライアンスの考え方を大学において学習することが可能となるであろう。その規定において、研究会参加者の構成要素を、正会員、準会員、見学者などに細分化し、それぞれの地位を定義づけた。この中で月会費が発生するものは正会員のみである（2012年3月現在）。また、これらの構成要素のほかに、オブザーバーを設定し、研究会活動に外部の影響力をもたらすことになった。

また、会員それぞれのスキルには相違が認められる。とりわけ上級生の方が下級生よりもスキルが高い傾向にある。しかしながら、上級生と下級生という上下関係も重要であるが、それよりもむしろ、会員個々人の研究会内における努力が学年の上下とは関係なく正当に評価されるべきであり、会員の地位を研究会における独自の規準（例えば、プレゼンの経験やBATIC®のスコアなど）に基づき5段階に設定することにした。このことにより、会員相互間の競争が研究会内において良い意味で生まれることを期待している。さらに、「いつ、どこで、何を実施したか」ということを常に会員に把握させるために、「研究会備忘録」が研究会開催日にすべての会員にメールで配信されることとなった。

研究会外部者によるゲスト・プレゼンテーションなどの実施

高木研究会では、時折、ゲストを交えての議論や討論を行っており、研究会内に外部的な影響力がもたらされ、これが、会員の大きな刺激となっている。このことに関し、平成23年7月4日（月）から7日（木）まで、大分県立大分商業高等学校教諭、小幡さゆり氏を、氏の初任者研修の一環として本学国際経営学部^{おぼた}に受入れ、筆者担当の講義・演習を参観していただき、専門高校における生徒の大学進学を見据えた教科指導について考察する機会を提供した。小幡氏は、勤務校における進路指導に関し、非常に熱心な、新進気鋭の高校教師である。その際、高木研究会の会員が小幡氏のヒアリング調査に全面的に協力する体制を敷いた。そして、現役の高校教師からの高大接続に関する聞き取りに応じることで高木研究会の会員は、普段考えることの少ないであろう、高校教育、とりわけ専門高校における進学可能性と大学教育への接続や専門高校と大学との連携という問題に関し、大いに関心を持つことができたであろう

し、会員個々人が大学生として何をなすべきか、ということについて客観的に検討することができたであろう。むろん筆者も大いに勉強になった。また、平成23年度には、本学の文学部に在籍する4



大分商業高校教諭
小幡さゆり氏

回生で既に企業に内定している学生に依頼し、就職活動に関するプレゼンを行ってもらった。これにより、就職活動のまさに当事者でもある3回生である繁里研究室長だけでなく、会員全員にとり、本プレゼンが、就職するということはいかなることなのかということを考えるきわめて有意義な機会となり、また、会員個々人は、現在における就職活動の舞台裏に触れることができた（国際経営学部には、2012年3月段階では3回生が最上級生である）。そしてさらなる新しいゲストによるプレゼン等を企画し、研究会の質的な側面を担保していきたい。

平成24年度の活動目標

まずは、テクニカル・プレゼンテーションやテクニカル・ディスカッションの技術をさらにブラッシュ・アップしつつ、英会話、BATIC®の学習といったルーティンの研究会活動をさらに進捗させるとともに、例えば、パネルディスカッション、公開討論会、学生の観点から検討するFD討論会、学外研修などを企画し、実現していきたい。また、英語によるプレゼンやディスカッションも積極的に進めていく。同時に、新規に活動したい人材の確保も急務であ



筆者と会員による研究会の活動模様

る。さらには、近隣の高校に在籍する高校生などの体験入会等の機会も創設していきたい。そのためには、高木研究会の活動活発化を促進させるとともに、高木研究会が地域社会に対し、積極的に貢献していくことが求められる。

これからの高木研究会の活躍にご期待いただきたい。

本稿の執筆に際し、大分県立大分商業高等学校教諭、小幡さゆり氏より、氏の記事・写真掲載を快諾いただいた。また、東京商工会議所検定センターからは、BATIC®の概要説明ならびにウェブ・サイトのグラフ使用の許諾をいただいた。さらに、BATIC®受験に際しては、別府商工会議所に継続的なご支援をいただいている。よって、ここに記して心より御礼申し上げる次第である。